tovo トヴォ PLUS

www.tovo2011.com

SEASON 2

NO. 014

20130511

あおもりの100家族、わたしたちのこれから。

www.tovo2011.com

インタビュー

今号のご家族▶大賀 重樹さん・佳子さん・万緒(まお)さん・千聡(ちさと)さん・一心(いっしん)くん・百登(ももと)くん

撮影場所▶新青森駅(青森市)

●2011年3月11日のこと、憶えていますか?▶重樹さん「勤務先にいました。家族とは全然連絡が取れなくて、電話ももちろんつながらなくて。」 **佳子さん**「仕事で外出していました。国道の信号機が全部止まっていて、すごい渋滞になっていて。」 **万緒さん**「中1で、ちょうど5時間目の授業中。『校内放送が入ってから避難する』って考えてたんですけど、停電で放送がかからない。先生方が校内をスピーカーを持ってまわって、体育館に集まってから集団下校しました。」 **千聡さん**「家にいた。インフルエンザの時期で学級閉鎖してたから。揺れたとき、うちは線路が近いから電車かなと思ったけど、ずっと続いて、近くのものが落ちてきたりとかしたから、地震だって分かった。」 **一心くん**「ちょうど学校から帰るところで、揺れる前からダッシュで走ってた(笑)」 **●揺れてることに気付いた?▶一心くん**「家に着く寸前に(笑)」 **百登くん**「幼稚園のときで、もう家に帰ってた。とにかくテーブルの下にもぐった。」 **●その後は?▶重樹さん**「家に帰ったら全員揃っていたので安心しました。うちはおじいちゃんとおばあちゃんもいるんですけど、みんなを一階の一部屋に集めて、丸ストーブを真ん中に置いて、明るいうちにご飯を食べて、明るいうちに布団を敷いて。キャンプによく行っていて電気が無いのは平気なので、『キャンプみたいだね』なんてランタンつけて。」 **佳子さん**「子どもたちはむしろ、『いつもと違う感じ』なんて、ちょっとわくわくしてたと思う(笑)」 **●震災以降、何か変化は。▶重樹さん**「避難場所を、子どもたちが通っている小学校に決めました。それまで決めてなかったんですけど、いざという時には連絡が取れなくても小学校に行くんだよって、確認しましたね。私自身は、1日1日を大切に子どもたちと過ごして、きょうで子どもたちと会えなくなっても悔いが残らないように、けんかしたままその日終わらないとか、1日が終わるときには感謝の気持ちを持つようになった。」 **佳子さん**「『津波てんでんこ』の例もあるけど、家族がお互いに信頼し合わないと、バラバラに逃げられないんだなと私自身がすごく感じた。やっぱり母親って、何かあるとすぐ子どものところに駆け付けたいというか、自分が助けに行きたいって思っちゃうんだけど、そうじゃなくて、子どもたちが自分で逃げられるようにさせる、それが親の務めなんだなと、考えるようになりました。」 **万緒さん**「何かあったら、長女だから下の子を守んなきゃいけないと思ってる。責任感が出た感じ。」 **●10年後のイメージは?▶重樹さん**「自分は以前からやっているボランティアみたいなものを続けられたらいいと思う。10年後は子どもたちも大きくなってバラバラに暮らしていると思うので、何かあったときに自分で自分の命を守れるようになっていたらいいなと思いますね。」 **万緒さん**「獣医になりたいと思っているので、希望通りにいけばちょうど大学院を出るころ。大学から1人暮らししていると思う。」 **千聡さん**「保育士か幼稚園教諭になりたい。」 **一心くん**「いま悩んでる感じ…。」 **百登くん**「僕は1人暮らしはしないで、家族みんなで一緒にいたい。」 **佳子さん**「みんな健康で、元気で、できれば私と夫も元気で(笑)」

定期購読のお申し込み 1年間の定期購読を承ります。1,500円(送料・寄付含)/1年間(12号)です。ご希望の方は、「郵便番号・ご住所・お名前」を明記の上、メール(info@tovo2011.com)にてお申し込みください。シーズン1(No.000〜No.011/12号セット)は、1,500円で販売中です。

編集後記 6人を同時にインタビューしたのは初めての経験。6人バラバラの「あの時」があって、その経験が改めて「家族」を問う機会につながっていく様子が、よく伝わってきました。あの3月に中1だった子はこの春、高校生に、幼稚園だった子は小3に。時間が流れる中で、10年後の自分は何ができているのか、私自身に問う機会ともなりました。【前田ふひと】

東日本大地震・津波遺児チャリティー

tovo トヴォ

2011年6月〜2013年4月25日まで

¥1,463,136

を「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」へ寄付することができました。ご協力に感謝いたします。

【tovo/トヴォ】は、2011年3月11日の東日本大震災によって、親を失った子どもたちを、青森から支援するプロジェクトです。チャリティーグッズを制作・販売し、その経費を除いた全ての収益を、あしなが育英会「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」へ継続的に寄付し、青森から「あなたがたのそばにいつもいますよ」と伝え続けます。ご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

【代表】小山田 和正【住所】〒037-0056 青森県五所川原市末広町14-1【web】http://tovo2011.com【mail】info@tovo2011.com【twitter】@tovo2011

014 (2013.5.11号) テキスト

今号のご家族▸大賀 重樹さん・佳子さん・万緒さん・千聡さん・一心くん・百登くん
撮影場所▸新青森駅（青森市）

【インタビュー】
●2011年３月11日のこと、憶えていますか？
▸重樹さん「勤務先にいました。家族とは全然連絡が取れなくて、電話ももちろんつながらなくて。」
▸佳子さん「仕事で外出していました。国道の信号機が全部止まっていて、すごい渋滞になっていて。」
▸万緒さん「中１で、ちょうど５時間目の授業中。『校内放送が入ってから避難する』って考えてたんですけど、停電で放送がかからない。先生方が校内をスピーカーを持ってまわって、体育館に集まってから集団下校しました。」
▸千聡さん「家にいた。インフルエンザの時期で学級閉鎖してたから。揺れたとき、うちは線路が近いから電車かなと思ったけど、ずっと続いて、近くのものが落ちてきたりとかしたから、地震だって分かった。」
▸一心くん「ちょうど学校から帰るところで、揺れる前からダッシュで走ってた（笑）」

●揺れてることに気付いた？
▸一心くん「家に着く寸前に（笑）」
▸百登くん「幼稚園のときで、もう家に帰ってた。とにかくテーブルの下にもぐった。」

●その後は？
▸重樹さん「家に帰ったら全員揃っていたので安心しました。うちはおじいちゃんとおばあちゃんもいるんですけど、みんなを一階の一部屋に集めて、丸ストーブを真ん中に置いて、明るいうちにご飯を食べて、明るいうちに布団を敷いて。キャンプによく行っていて電気が無いのは平気なので、『キャンプみたいだね』なんてランタンつけて。」
▸佳子さん「子どもたちはむしろ、『いつもと違う感じ』なんて、ちょっとわくわくしてたと思う（笑）」

●震災以降、何か変化は。
▸重樹さん「避難場所を、子どもたちが通っている小学校に決めました。それまで決めてなかったんですけど、いざという時には連絡が取れなくても小学校に行くんだよって、確認しましたね。私自身は、１日１日を大切に子どもたちと過ごして、きょうで子どもたちと会えなくなっても悔いが残らないように、けんかしたままその日終わらないとか、１日が終わるときには感謝の気持

ちを持つようになった。」
▶佳子さん「『津波てんでんこ』の例もあるけど、家族がお互いに信頼し合わないと、バラバラに逃げられないんだなと私自身がすごく感じた。やっぱり母親って、何かあるとすぐ子どものところに駆け付けたいというか、自分が助けに行きたいって思っちゃうんだけど、そうじゃなくて、子どもたちが自分で逃げられるようにさせる、それが親の務めなんだなと、考えるようになりました。」
▶万緒さん「何かあったら、長女だから下の子を守んなきゃいけないと思ってる。責任感が出た感じ。」

●10年後のイメージは？
▶重樹さん「自分は以前からやっているボランティアみたいなものを続けられたらいいと思う。10年後は子どもたちも大きくなってバラバラに暮らしていると思うので、何かあったときに自分で自分の命を守れるようになっていたらいいなと思いますね。」
▶万緒さん「獣医になりたいと思っているので、希望通りにいけばちょうど大学院を出るころ。大学から１人暮らししていると思う。」
▶千聡さん「保育士か幼稚園教諭になりたい。」
▶一心くん「いま悩んでる感じ…。」
▶百登くん「僕は１人暮らしはしないで、家族みんなで一緒にいたい。」
▶佳子さん「みんな健康で、元気で、できれば私と夫も元気で（笑）」

【編集後記】６人を同時にインタビューしたのは初めての経験。６人バラバラの「あの時」があって、その経験が改めて「家族」を問う機会につながっていく様子が、よく伝わってきました。あの３月に中１だった子はこの春、高校生に、幼稚園だった子は小３に。時間が流れる中で、10年後の自分は何ができているのか、私自身に問う機会ともなりました。【前田ふひと】

【寄付総額】2011年6月～2013年4月25日まで、『¥1,463,136』を「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」へ 寄付することができました。ご協力に感謝いたします。